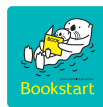


Bookstart Newsletter



ブックスタート・ニュースレター

2020
春

No.68



静岡県三島市

特集

ボランティアの募集と養成

昨年、当法人ではブックスタート実施自治体を対象にアンケート調査（※）を行いました。その結果、「ボランティアの募集・コーディネート」「職員・ボランティアの研修」に課題を感じている自治体が、それぞれ3割前後あることが分かりました。

「ボランティアの高齢化や、新規ボランティアの確保が課題」「ボランティアの登録者数は多いが、参加率が低い」「研修を行う予算や時間がない」「研修を企画しても参加しない方がいる」など、アンケート調査には様々な声が寄せられました。

一組一組の親子に丁寧に対応していく上で、ボランティアの存在が欠かせない自治体も多い中、今後どのようににその人材を確保し養成するのか。今回の特集では、静岡県三島市の取り組みと、ボランティア・市民活動のサポートをしている相談担当専門員のアドバイスを紹介します。

※2019年5月時点でブックスタート事業を実施する1044市区町村を対象に実施。回答数は982（回収率94・1％）。

専門家から

協力者を増やし、より良い活動にするための
アドバイスを聞きました！



東京ボランティア・市民活動センター
相談員

安井 忍 さん

関心を持ってくれる人を増やす工夫を

地域を支える活動を行っているどの組織でも、ボランティアの確保は大きな課題になっています。

でも、“子ども”に対する社会の関心は高いので、ブックスタートでも、そこをキーワードにボランティアを募集してはどうでしょう？例えば、子どもに関する活動をしている団体・人たちとつながりを作ったり、そうした人たちが集まるイベントに参加するなどして、ボランティアを呼びかけることもできると思います。また、赤ちゃんとお面してやりとりできるなど、活動の魅力が具体的に分かる、協力してくれる人が広がるかもしれません。

ただ、子どもに関心があっても「読みきかせは自分にはできない」と感じる人や、活動の時間が心配な人もいます。ですから、子どもと間接的にかかわる会場の誘導係など役割を限った募集や、時間を前半／後半の2交代制にして時間を短くするなど、多くの人が参加しやすい方法を検討してもよいでしょう。

とはいえ、ボランティア募集で最も有効なのは“口コミ”です。ボランティア活動が盛んなアメリカで、活動を始めたきっかけを調べたところ、「友人に誘われた」という回答が最も多かったといいます。チラシを配付するだけでなく、顔が見える形でアピールしていくことが重要です。

ボランティアセンターに相談

各市区町村の社会福祉協議会などが運営しているボランティアセンターの中には、ボランティア

団体・個人のリストを作成しているところもあります。そうしたところに相談してみるのも一案です。保育・教育系の学生に伝えてもらえるよう、大学のボランティアセンターに問い合わせてもよいでしょう。

なお、ボランティアセンターでは、「楽しく活動するために」などのテーマでボランティア向けの研修も行っています。養成についても、一度相談してみてもどうでしょうか。

動機を把握し、感謝の気持ちを伝える

ボランティアをしていると、少しずつ活動内容が本来の趣旨から外れてしまうことがあります。例えば、子どもが安全に遊べるよう見守るはずのボランティアが、気づくと一緒に遊んでしまうことに集中してしまうといったケースです。そのため活動の目的や内容を記した会則をつくり、合意書にサインをしてもらっている団体もあります。また、活動を振り返る機会を持つことも大事です。

「赤ちゃんと接したい」「絵本が好き」などブックスタート・ボランティアへの応募動機は人それぞれだと思います。動機を聞いておくことで、一人ひとりに沿った対応も可能になります。そして、ボランティアには感謝の気持ちを伝えることも大事です。

私たちは、ボランティア活動の4原則として以下を掲げています。

ボランティア活動の4原則	
1	自分から進んで行動する「自主性・主体性」
2	ともに支え合い、学び合う「社会性・連帯性」
3	見返りを求めない「無償性・無給性」
4	よりよい社会をつくる「創造性・開拓性・先駆性」

活動者に4原則を発揮していただき、市民協働の活動として互いに手を携え、今後も取り組みを続けていただければと思います。

NPO ブックスタートから

2019年度の試行実施が好評だった、自治体負担額0円での研修会への職員派遣（募集件数3件）を2020年度も継続するほか、自治体負担額1万円での職員派遣（募集件数10件）を新たに試行します。研修や活動の振り返りにも役立つ「ブックスタート・スタッフガイド」も無料で提供しています。詳しくは、お問い合わせください。



ブックスタート・スタッフガイド

ケーススタディ
静岡県三島市

「任期」を設定し、応募しやすく

3か月児健康教室でブックスタート事業を実施している三島市。事業に携わっているボランティア30名は、2年の任期（希望すれば更新可能）で活動を行っています。

「活動歴の長いところに、途中からはなかなか入りづらいもの。でも、任期があり定期的に募集があることで、初めての人も気軽に応募することができそうです。ボランティアにとっても図書館にとっても、先の見通しが立てやすいという利点もあります」と図書館職員の志村典子さん。任期を設定することで新しい人が参加しやすくなっています。

「養成講座」には
新人もベテランも参加

ボランティアは市の広報紙などを通して募集。養成講座（全4回）の受講が必須です。中には負担に感じる人もいますが、それでも参加しようという意欲のある方にこそ協力して欲しいという思い

ブックスタート・ボランティア養成講座
(2019年度)

内容	
第1回	ブックスタートとは 担当：NPOブックスタート職員
第2回	赤ちゃんの成長と発達 担当：健康づくり課職員
第3回	ブックスタートの手順 担当：図書館職員
第4回	ブックスタート見学

もあるといいます。

任期更新の場合も養成講座の受講が義務づけられています。長く活動している中で、事業への理解が逸れてしまう可能性もあるため、基本に立ち返る場として再受講をお願いしているそうです。

養成講座修了者には「協働して事業を行っていきましょう」という思いを込めて依頼状を手渡し、新年度から活動に参加してもらいます。

「記録用紙」を情報共有に活用

ボランティアは、毎回活動終了時にその日の感想や気づいたことを記録用紙に記入。その中で、「図書館に授乳室があるか聞かれて困った」など全員で共有すべきことがあれば、次回活動時の打ち合わせで今後の対応を伝えています。日々の記録

を単なる活動の確認だけでなく、ボランティア全体のスキルアップにつなげています。

「手順書」にノウハウを結集

ブックスタート実施に関する手順書も作成。事業概要や対象者への説明の仕方、手渡す絵本の特徴、外国語を母語とする親子など様々な対象者への配慮、記録用紙をもとにしたQ&Aなどを掲載しています。

事業の趣旨を再確認したり、蓄積されたノウハウを活用できる有効な資料として、ボランティアの活動を支えています。



ブックスタート・ボランティア
手順書（左）。活動前に、手順書
を確認するボランティアも（右）



「ボランティア連絡会議」を
1年に1回開催

ボランティアは2班に分かれて活動を行っているため、全員が顔を合わせ交流する機会として、毎秋、連

絡会議を開催しています。

会議では、対象者への説明の仕方を確認したり、会場入りする時間など気をつけて欲しい事項を伝えたりしています。手順書に書かれている内容もありますが、直接話すことでより理解が深まるそうです。

ボランティアどうしの意見交換も実施。新人ボランティアにとって、活動に慣れてきた頃に行われるため、気になっていることを相談できる場になっています。例えば、絵本に関心がなさそうな保護者への対応について質問が出た時は、ベテランのボランティアが自身の経験を紹介。互いの経験を共有し学び合うことで、より対象者に寄り添った対応を目指しています。

連絡会議に参加しなかった方には、後日議事録を配付し、同じ情報を共有できるようにしています。



ほっと PHOTO

全国各地から、ブックスタートの
ほっと心があたたくなる写真や
話題をお届けします！

各地域の話題は当法人ウェブサイトのスタッフ
ブログでもご紹介しています。
各 QR コードにアクセスしてご覧ください。

神奈川県鎌倉市



わらべうたや手遊び
も紹介して、楽しい
絵本タイムを過ごし
ます。
[ブログ 2019/5/30]



山梨県北杜市

自由に絵本を楽しんでくださいね、と丁寧に
メッセージを伝えます。 [ブログ 2019/12/20]



香川県宇多津町

ボランティアの素敵な
笑顔で親子もリラックス
[ブログ 2019/9/30]



茨城県日立市

小学生の「子ども通信員」によるブックスタートに
ついての取材レポートの特集。日立市 Web サイト
でご覧になれます。
[日立市報 令和元年 8 月 5 日号]



コトコト ことのは

スタッフが出合った言葉

息子よ。／ そのままで、いい。／ それで、うちの子。／ それが、うちの子。／ あなたが生まれてきてくれてよかった。

自閉症のわが子へ、父親がつづった詩の一節から。

この詩と出合った時に感じた思いがあります。それは、すべての子どもが、置かれた環境や生まれ持ったものにかかわらず、誕生を心から祝福される社会でありたいということ。そして、どの子どももれなくありのままに成長できる環境づくりの礎に、私たち一人ひとりがなれるようにということでした。＊『障害を持つ息子へ〜息子よ。そのままで、いい。〜』神戸金史 著／ブックマン社